

△遠刈田村印象記

東 敏 雄

とくに蒐集しているわけではない。贈られたり贈ったりして、出

入りの激しかったわが家のこけしのなかで、この遠刈田で求めたひとつが長いこと部屋の片隅にあった。二十と何年前、ここでバスを降り、退屈するような緩やかな坂道を歩いて、そして蔵王に登った。わが家のこけしはその昔を知っているはずである。それとは別に、この近辺に散在する古いひなびた温泉宿を、なけなしの財布をはたいて訪れたことは何度もある。みんな、かなり遠い以前のことである。遠刈田で開かれる村研大会は、わたくしの心を誘ういろいろなものをもっていた。正確な人数は聞き忘れたが、何年振りという盛大な懇親会をみても、そしてあちこちにみられる古い顔々をみても、なにか共通の想いめいたものをそこから読んでとることができさる。

だがそれにしても、宿は立派だ。いや立派すぎる。整いすぎている。道は舗装され、あまりにも山頂へ続きすぎている。宿の中、居酒屋風の、そのいろり。赤いランプの上に組みあげられ人目を欺く檜の丸炭。そしてショウとなつてしまった民謡。昭和三〇年から四〇年代にかけての激動はここでも例外ではなかった。登んだ大気、美しい紅葉、そしてなによりも、まるやかな湯の加減。それはいまも変らない。にもかかわらず、その中にあるこの人工の交りよう。それはいったい、われわれ自身にとって何なのであろうか。

今年の大会の共通課題は「家」であった。「家」を歴史的とでもいおうか、ともかく変化の中で把握しようとするものであった。われわれの住む、この資本主義社会、その形成確立期、ファシズムへの移行期、そして戦後という、それぞれの時期に対応して「家」を把

握し、もって、現在の「農民の家ないし家族」の状況を、その動態の到達点として理解しようという、その辺に焦点がおかれていた。大会を準備する研究通信はそんな風に問題を提示していた。細かいことは抜きにしても、この課題を果すことのいかに難しいことであるのか。近年、大会での報告を聞きながら、自分でも討論に参加しながら、絶えずつきまとう印象のひとつはそれであった。今年もまた例外ではない。

われわれの携わっている研究分野の多くは、研究自体の成立の基礎を資本主義社会の生成の中においている。資本主義社会においてこそ、人間と人間の関係を法的に把握することのできるいわば物的な基礎が形成されるからであろう。何ごとでもそうであろうが、一旦、形成された体系が細分化され、専門化されてゆくと、その当初の基本的な関連が希薄化してゆく。空高く舞い上った風は、糸の出どころがもはや見えない。問題が複雑になり、錯綜すれば、解決策はただひとつ、単純な関係に戻してみるだけだ。そもその研究それ自体の成立の根拠に帰って。そんな想いが脳裏をかすめる。

以前は、よくノートを克明にとつたものである。近ごろはノート代りにテープ・レコーダーを利用する。書くという労働を省いて、報告者の思考と聞き手の思考のスピードをあわせてみようというささやかな試みでもある。逆に、余分なことを考えてしまえばいいもある。柿崎会員の白川村の報告や、二宮会員の能登本島の報告をききながら、資本主義社会の構造とか類型とか、そういう類の思考が断片的に浮んで消えた。最高度に発達した資本主義社会において

は、遅れてスタートする諸国は必然的に先進諸国の強い影響をうける。それは先行諸社会のばあいとは異質である。いわば、資本主義社会として均質化を強要されてゆくのである。しかも、それぞれ先社会から引継いだ独自の歴史的遺産を背おいながら。現実はその混合である。混合の論理と方法は、その構築は報告されている具体的事実とどのような相互作用をもつのか。そんな想いが駆けめぐる。

何ごとでもそうであろうが、ともかく一旦成立して、よかれ悪しかれ循環性を確保すると、その根本が変化するのは大変である。一国の経済構造とでもなればなおさらである。大野会員の報告や、布施会員の報告、そして益田会員の報告を聞きながら、時折りそんなことを考えていた。……昭和三〇年代以降の変化。それは日本の経済構造の根本をどんな風にかえたのか。それは、日本資本主義のあたらしい類型の形成なのか。類型とか構造とかいわれるものの「変る」論理、転換の論理を、絶えず問題意識の中に持ちたいものだ。そんなことを考えながら、どの報告も極めて興味深く聴いた。「それにしても家の問題もほんに難しいものだ」……。まあ、細かなことはよしにしておこう。「大会印象記」なのだから。

以前、鳴子の農民の家で大会を持った折、私は受付やら案内やら雑用係の一人として走り回っていた。会場の大広間のその奥に板張りの風呂があって、そこで燗をして酒を飲んだ。報告がはじまっていたって、湯上がり姿で広間を通らねばならず、これにはいささか閉口した。それにしても、どの部屋に行っても酒があり、車座があ

り、議論があった。今年の大会にもそれがあつた（と思う）。村研の伝統は生きている。元気な竹内会員。鳴子と遠刈田が重なり合う。建物も立派になった、なりすぎた、道もそうだ。だが酒があり、車座があり、議論がある限り、「高度経済成長」も村研を変えることはできない。こんな素晴らしい大会を設営して下さった東北大学の皆さんには、心から感謝をせねばなるまい。